
レストラン‘デュック’

すっぱい小梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レストラン、デュック、

【Nコード】

N0894K

【作者名】

すっぱい小梅

【あらすじ】

雪の降る寒い日。こんな時にカレーが食べたくなった。そうだ、近所の洋食屋へ行こう。

(前書き)

カレーが食べなくなった時に書いた作品です。

目が覚めた。

もうコタツから出たくない寒さだった。

うつぶせになって寝ていた。

コタツからは顔を出して、首を出したまましばらく続けた。

ちょっと仰向けになってみたが、少し落ち着かない。

時計を見るとAM11…00になっていた。

コタツから台所へ向かい、流しの蛇口をひねり顔を洗った。

飯にしようと台所を見たが、鍋は昨日片付けたので残り物は無かった。

冷蔵庫を開けた。

すると空っぽだった。

またコタツに入った。

今度は体半分を入れ仰向けになって天井を見た。

30分が過ぎた頃、体を横に向け畳から廊下を目で追った。

そのまま外を見た。

地面に雪が積もっている。

まだ降り続いていた。

庭の松ノ木に雪が乗っかっている。

目を左にやると猫がいた。

こっちを見て鳴いていた。

その猫は近所の洋食屋で飼われている猫だった。

ふと、カレーライスが頭に浮かんだ。

頭に食べ物イメージが出ると腹が減ってきた。

そしてカレーが食べたくなった。

レトルトは食べ飽きたし市販は一から作るのは面倒くさい。

そう考えると外食になった。

時計は12時を過ぎていた。

財布を持って玄関へ向かった。

戸締りをしてから玄関を出ると、庭の猫が気になった。

玄関横の小道を通り、縁側の方へ抜けそつと覗いた。

猫は置石にちょこんと座っていた。

こっちに気づくと小さく鳴いた。

その体をつかんで腕に抱き上げた。

今度は大きく鳴いた。

しばらくしてから降ろしてやり、元来たところを通って玄関前に戻った。

視線が下に降りた。

ポストを見るとチラシが入っていた。

それは洋食屋の割引券だった。

財布の中に畳んでおくことにした。

少し雪が強く降ってきた。

やっとのことで、洋食屋へと足を向け歩いた。

後ろでは猫が後を着いてきていた。

洋食屋は家から徒歩で五分くらいの距離にあった。

赤山通りと呼ばれる街道筋を歩いて、生垣と木々の囲まれた住宅街の一画まで行った。

ここで一週間前のことを思い出した。

友達の家でカレーパーティーがあった。

カレーパーティーというのは、友達メンバーの誰かが誕生日を迎えた時にみんなでお祝いすることだった。

料理部で、全員カレーライスが大好きだった。

パーティーでは特別なカレーが出された。

中には凝りすぎて、冒険心たっぷりの味になったりするのだった。

あの日のカレーもひどかった。

具や盛り付けが奇抜すぎて、手をつけたくなくなるほどだった。

それでも飲んだり、ゲームしたりだったから楽しい時間だった。

みんなで祝うことは楽しいのだが、もうちょっとカレーの味はしっかりした方がよかった。

店の前まで来た。

店構えがスナックかバーのような雰囲気で、看板の蛍光灯の文字はイルミネーションされていた。

この辺りは、高層マンション群が並び建つ、再開発された場所と違って時が止まっていた。

しばらく突っ立っていると、あの猫が店に入りたそうにこっちを見て鳴いた。

ドアを開け、中に入った。猫も後に続いて付いてきた。

店の入り口で少し明かりが暗く感じた。

昼時なのでお客は結構入っていた。

店員が席まで誘導した。猫は店の奥へといなくなった。

店内奥壁側のテーブルの席に着いた。

壁には額が掲げてあった。

天馬が、厚い雲から地上に向かって駆け下り、それを地上の農夫が見ているのだった。

椅子に座ると目線上で、ガラスに装飾を施されたランプが吊り下げられていた。

メニューを開いた。

定食からオムレツにハンバーグへ、そしてカレーライスと眺めていった。

しばらく迷ったが、ここはやはりカレーを頼んだ。

店員に割引券を渡し、お水を貰った。

店員がスプーンとフォークをテーブルに置いていった。

しばらくして店員は厨房の方へいなくなった。

待つ時間は退屈だった。

指を動かしたり、キヨロキヨロしたりした。

ゆっくり周り眺めてみた。

日当たりの良い窓側のテーブルで、よく整った形の服を着た老齡の夫婦がいた。

その向かいにはケータイをいじりながらも会話が弾み男女がいた。

トイレに近い所にノートPCを打ちながら、コーヒーを飲むスーツ姿の男がいた。

厨房の近くには口を開け、後ろのめりになって椅子で寝ている中年の男がいた。

店の真ん中では暖かそうなスープを飲む母親に、赤ん坊が物欲しそうな顔で腕に抱きつこうとしていた。

皿をもった店員がこっちに来了た。

いよいよカレーの登場だった。

横から皿が出た。

目の前にふわっとした卵がかかったカレーが出てきた。

ルーがたっぷりのご飯が少し残るぐらいにかかっていた。

ふかしたジャガイモとにんじんがルーのかかっているところに置かれていた。

そして、福神漬も少々添えてあった。

いよいよと、スプーンで卵からすくってみた。

すると湯気があがった。

皿の底までスプーンを挿し、ご飯とルーがこぼれないようにゆっくりと上げ、口に運ぶ。

スープのように中へ広がっていき、同時に熱々のご飯とルーが合わさってうま味が増えてきた。

この感じが至福の時だった。

ふかしたジャガイモとにんじんはフォークで丁寧に切っていく、口に入るくらいに切っておいた。

そして二口目に卵がかかったルーの上に載せ、またスプーンでゆっくりと口に運んだ。

ご飯とルーは同じ比率で食べていった。

米粒一つ、ルーと一緒に食べ進めないと残った福神漬けに申し訳ない。

じつくりと堪能した。

客が少しずつ減っていなくなった。

最後の米一粒一粒と福神漬けを口にかき進めた。

最後にスプーンを皿に置き、完食した。

店員が側に立って待っていた。

閉店の時間だった。

食したカレーライスは三十皿になった。

店員の足元で猫があくびをかいてこっちを見てきた。

レジでお会計の時、おつりと一緒にあの割引券を受け取った。

店員は送り迎えに丁寧とお辞儀をした。

店のドアを開けてもらった。

それと同時に、足元で猫は「にゃー」と声を鳴らした。

終り。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0894k/>

レストラン‘デュック‘

2010年12月18日14時40分発行